

要 旨

通常学級における特別な支援を要する児童への対応が課題となっている。そこで、特別な支援を要する児童にとって、学校生活の多くの時間を占める授業が、分かる喜びや学ぶ意義を感じることでできるものとするために、児童の特性を把握し、その特性を考慮した適切な手立てを取りながら、授業展開を工夫することが必要となる。対象児童の実態把握を基に、認知と学習のスタイルには多様性があるという考え方に立った、特別支援教育の視点を取り入れた授業展開を工夫することにより、対象児童にとって、より楽しく分かりやすい授業になることが分かった。

〈キーワード〉 ①児童の特性を考慮した授業展開 ②認知と学習のスタイルの多様性
③特別支援教育の視点を取り入れた授業

1 研究の目標

通常学級における特別な支援を要する児童がよりよい学校生活を送ることができるようにするために、児童の特性を考慮した授業展開の工夫を探る。

2 目標設定の理由

文部科学省の「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」において、障害の程度に応じて特別の場で指導を行う特殊教育から障害のある児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じて適切な教育的支援を行う特別支援教育への転換を図ることが提言された。また、「平成21年度佐賀県教育委員会の基本戦略」においても、特別支援教育の推進が掲げられており、児童一人一人の教育的ニーズに応じ、きめ細かな教育を推進することが明記されている。

それらを受け、学校現場においても、校内外における研修等により、通常学級における特別な支援を要する児童への理解は深まってきた。しかし、特別な支援を要する児童の特性を把握し、その児童の特性を考慮した適切な手立てをとりながら、授業展開が行われているかという点とまだ十分ではないと考えている。授業に集中できなかつたり、友達とうまくかかわることが苦手だったりする特別な支援を要する児童にとっては、授業が分かる喜びや学ぶ意義を感じることでできないものになってしまっていることが考えられる。授業時間こそ学校教育の中心となる時間であり、児童の特性を考慮して授業展開を工夫していくことが重要であると考えている。

そこで、本研究ではグループの研究テーマ、研究課題を受け、特別な支援を要する児童の特性を、観察、担任やかかわる教師などからの聞き取り、児童へのアンケート、チェックリストなどで把握する。そして、児童の特性を考慮して、教材・教具の作成、発問・指示の工夫等を行いながら、授業展開の工夫を図ることで、対象児童がよりよい学校生活を送れるようになることにつながっていくと考え、本主題を設定した。

3 研究の内容と方法

- (1) 発達障害に関する書籍や研究紀要などの文献を通して、様々な発達障害に関する理論研究や発達障害のある児童に対する指導法に関する先行研究の調査を行う。
- (2) 観察、担任やかかわる教師などからの聞き取り、児童へのアンケート、児童の実態把握のためのチェックリストなどを行って対象児童の実態を把握し、考察をする。
- (3) 児童の実態を踏まえた上で、特性を考慮した学習指導案を作成したり、教材・教具の用意をした

りする。

- (4) ビデオ分析や児童へのアンケート，また，参観者へのアンケート等による授業の検証を通して，特性を考慮した授業展開や教材・教具の有効性，対象児童の様子について検討し，研究の成果と課題をまとめる。

4 研究の実際

(1) 理論研究

ア 授業作りの視点

2001年5月に、WHO（世界保健機構）がICF（国際生活機能分類）を採択した。それまでは、障害のマイナス面を分類するという考え方が中心だったが、生活機能というプラス面から見るように視点の転換がなされ、さらに環境因子などの観点が加えられた。例えば、足が不自由だとしても、社会にバリアフリーが完備され、社会参加への活動が制限されないようであれば、障害の程度は軽減されるという考え方である。このことにより、障害は活動が制限されたり、参加が制約されたりする状況であるとされ、周囲の環境の在り方によっても、その状況は変化するととらえられるようになった。ここでいう環境とは、特別支援学校学習指導要領解説自立活動編（幼稚園・小学部・中学部・高等部）に記されている、環境因子（福祉用具や建築等の物的環境，家族や友人等の人的環境，制度やサービス等の社会環境）と同義とする。

児童を取り巻く環境は、学校、家庭、地域社会など様々なものがある。児童が多くの時間を過ごす学校は活動の場であり、社会参加の場でもある。品川裕香は、「学校という『環境』の支援体制を整えることで、個人活動が制限されたり社会参加が制約されたりしなければ、ADHDやLD、アスペルガー症候群などの傾向があっても、障害にはならない」¹⁾と述べている。品川が言う「学校という『環境』」は、友達や教師などのかかわる人、遠足などの行事、掲示物などの身の回りのものなどが考えられ、授業もその中の一つととらえることができる。授業という環境を考える際に品川の視点は重要と考える。

イ 特別支援教育の視点を取り入れた授業

品川は、「認知と学習のスタイルには多様性がある」²⁾と述べている。このことは、情報の受け取り方（認知）と情報の活用処理の仕方（学習のスタイル）は、それぞれに異なるということであるととらえる。このように、認知と学習のスタイルには多様性があるという考え方に立った授業を、特別支援教育の視点を取り入れた授業であるととらえ、研究を進めていくことにした。その際、児童の苦手な部分への配慮だけでなく、得意な部分を生かすことで、より効果的に児童のやる気を引き出し、よりよい学校生活を送れるようになることにつながっていくと考える。

児童の実態把握においては、日ごろのきめ細かい観察が基本であるが、学習面や生活面、行動面などの特徴を項目ごとにみていくチェックリスト等の活用をすることで、児童の状態や特性をとらえることができる。そして、それらを対象児童にかかわる複数の教員で行うことでより妥当性が増す。学校での友人関係などの環境を整えつつ、授業においても、実態把握で分かった児童の特性を考慮した手立てをとっていく必要がある。特別な支援を要する児童の特性を考慮して授業を行うことで、分かる喜びや学ぶ意義を感じることでできるものになると考える。

(2) 対象児童の実態

対象児童は、小学3年生の児童である。実態把握は、観察、担任やかかわる教師からの聞き取り、児童へのアンケート、チェックリスト（佐賀県教育センター「LD児等のスクリーニングのためのチェックリスト」）により行った（表1）。

表1 対象児童の実態把握

チェックリストの領域	苦手なこと・うまくできないこと	得意なこと・できること	考えられる手立て
読 む	音読が苦手で、読み間違ったり、読み方がたどたどしかったりする。漢字の習得が不十分であまり読めない。	ひらがなをゆっくり読むことができる。 教師の後に続けて読むことができる。	ワークシートや課題にふりがなを付ける。 課題を声に出して読む場を設定する。
聞 く	指示を聞いても、忘れることがある。 指示を聞いても、理解できず、行動に移せないときがある。	短い指示であれば理解でき、行動に移すことができる。 教師が具体的にやり方を示しながら説明すると理解しやすい。 話を聞く際、図や絵など視覚的な情報がある方が理解しやすい。	繰り返しの発問をする。 課題のやり方を、図や絵などを使って例示する。 やり方がすぐに分かるようなワークシートを用意する。 図の提示の仕方を工夫する。
注 意	指示が分かっても、すぐに行動に移さないことがある。 指示を聞きもらすことが多い。	短時間であれば課題に集中できる。 周囲の様子や音に興味向き、すぐに反応することができる。 パソコンの学習ゲームなど動きのあるアニメーション、写真など視覚的なものに興味向きやすい。	情報を整理して提示する。 作業時間が短縮できる教具を用意する。 個別に声を掛け、注意を引き付けてから短く話す。 プロジェクタや絵による提示をする。 具体物を用意する。 動作化を取り入れる。
多 動 性	話を聞いているときに、いすを斜めにしたり、手遊びをしたりしている。	運動をしたり、作業などの活動をしたりすることで、行動が落ち着く。	作業活動やグループ活動の場を設定する。

(3) 支援の方針

対象児童の苦手なことに配慮しながらも、得意なことを生かすという視点で手立てを考えることにした。対象児童の実態把握から、実践授業①、②において、特に、文字や文章などを読むことや指示を聞くこと、注意を持続すること、多動性を考慮し、「指示を理解し、学習の進め方が分かるようにするための手立て」と「学習課題に集中できるようにするための手立て」を設定し、授業に臨むことにした。

(4) 事例研究 I (実践授業①)

ア 単元について

単元名 算数科 「円と球」 (全7時間)

本研究の指導計画 (表2) を次のように設定した。

表2 指導計画

時数	指導目標
1 / 7	○ 身の回りの円や球の形をしたものを進んで見付ける。 ○ 正方形の折り紙にできるだけ大きく、きれいな丸い形をかく方法を考える。
2 / 7	○ 円の概念や中心、半径の用語の意味や性質を理解することができる。
3 / 7	○ 円の中心の見付け方を考える。直径の意味や直径と半径の関係を理解する。

イ 対象児童への主な手立て、様子、考察

対象児童への主な手立てと、その手立てに対する様子、考察を次頁表3に示す。

表3 算数科「円と球」における主な手立て、様子、考察

手立て	工夫	手立ての内容	児童の様子	考察
指示を理解し、学習の進め方が分かるようにするための手立て	声掛けの工夫	<p>周囲の音に興味向き、すぐに反応することができるを生かし、「～さんいいですか。」などと名前を呼んで話すようにする。</p> <p>教師の後に続けて読むことができるを生かし、教師が一度声に出して読み、その後に続けて読むよう声を掛ける。</p>	<p>次の課題に移る際、今やっていることをすぐにやめることが難しいときでも、教師が、「～さんいいですか。」と個別に声を掛けたり、そばに行つて目線を合わせたりすることで、すぐに教師の方を見てうなづくことができた。</p> <p>声に出して問題を読んだり、やり方の例示を見たりすることで、取り掛かることができた。</p>	<p>名前を呼ぶことで、教師の方へ注意を引き付け、指示を聞くための姿勢にすることができた。そのことが、指示の理解につながったと考える。</p> <p>教師が読んで聞かせることが読みの苦手を助けることにつながった。また、きちんと文章を読ませることが、指示の理解につながったと考える。</p>
	課題提示の工夫	<p>視覚的なものに興味向きやすいことを生かし、図に示したり、実際に作業したりして見せる。</p> <p>言葉だけの説明より、図や絵などの視覚的な情報がある方が理解しやすいことを生かし、半径と直径の長さの関係に気付くような図の提示の工夫をする（次頁図1）。</p> <p>短い指示であれば理解できることを生かし、短い同じ発問を繰り返すことができるようにするため、4種類の円（次頁写真1）を用意する。</p>	<p>教師が、図に示したり、実際に作業したりして見せることで、興味をもつて見ることができた。</p> <p>4つの円の直径の長さや半径の長さが並べて板書されたのを見ることで、半径と直径の長さの関係に気が付き、挙手することができた。</p> <p>繰り返しの発問を聞いたり、友達の発表の様子を見たりして、課題に取り掛かったり、発表したりすることができた。</p>	<p>図に示したり、実際に作業したりして見せることで、興味を引き付けたことが、具体的に作業の方法を理解することにつながったと考える。</p> <p>視覚的な支援が学習内容の理解につながったと考える。</p> <p>一度の発問でその内容を理解することは難しいが、発問、友達の発表、発問、友達の発表…と繰り返すことが、発問内容の理解につながったと考える。</p>
学習課題に集中できるようにするための手立て	作業活動での工夫	<p>作業などの活動をする中で行動が落ち着くことを生かし、作業活動の場を設定する。</p> <p>短い時間であれば集中できることを生かし、円は中心から同じ距離にある点の集まりであることを理解するための作業において、長さを測って印を付ける作業が簡単にできる教具（次頁写真2）を用意し、作業時間を短縮できるようにする。また、直径が12cm、10cm、8cm、6cmの長さの円を用意することで、半径も整数で表すことができるようにする。</p>	<p>作業活動に興味を示し、すぐに取り掛かることができた。</p> <p>長さを測って印を付ける作業が簡単にできる教具を使うことで、比較的スムーズに印を付けることができた。また、長さが測りやすい円を使うことで、半径や直径を自分で測ることができた。</p>	<p>作業活動の場を設定したことで興味を引き付け、集中して取り組ませるのに効果があったと考える。</p> <p>作業が簡単にできるようにすることで、測りやすい長さにすることで、作業時間を短縮でき、意欲の持続、作業への集中につながったと考える。</p>
	興味をもたせるための工夫	<p>パソコンなど視覚的なものに興味向きやすいことを生かし、プロジェクタによる提示をしたり、具体物を用意したりする。</p>	<p>プロジェクタによる課題の提示で、すぐに画面に注目することができた。間を空けない提示と視覚的に動きのあるアニメーションの提示により、注目し続けることができた。次々に提示される丸い具体物を注視し、それらの具体物を見ているうちに、「丸いもの。」と答えることができた。</p>	<p>プロジェクタによる課題の提示をしたり、具体物を提示しながら話したりすることは、興味をもたせるのに効果があったと考える。</p>

ウ 実践授業①を通しての課題

教師が黒板にめあてを書いた紙などを掲示する場面で、少し時間を要すると、聞く姿勢を維持できずに、手遊びを始めたたり、友達に話し掛けたりする様子が見られた。プロジェクタなどを使って、スムーズに提示する工夫がもっと必要だと考えた。

机上が整理されていないと、教科書の上で作業したり、筆記用具などで手遊びを始めたりする様子が見られた。使う道具が多い場合は、使う順に出させていったり、使わないものは片付けさせたりするなどの配慮が必要だと考えた。

休み時間が終わってすぐのときや、朝登校してすぐのときなどは、気持ちがまだ学習に向かないことがあった。授業の導入で興味を引き付ける工夫をし、学習への意欲を高め、スムーズに学習に取り掛かることができるようにする必要があると考えた。

これらの課題は、実践授業②での手立てとして取り上げることにした。

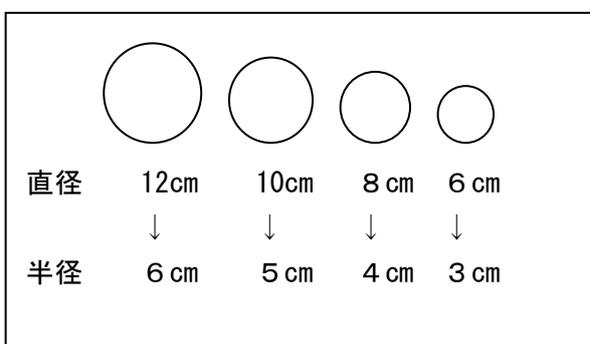


図1 図の提示の工夫

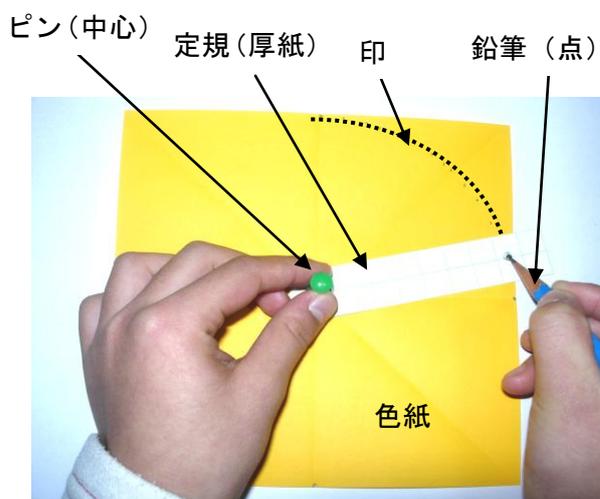


写真2 作業が簡単にできる教具

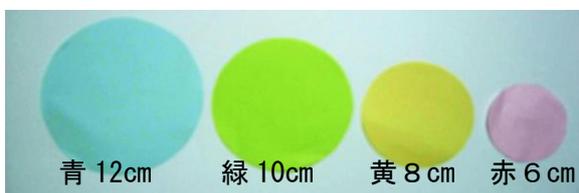


写真1 4種類の円

(5) 事例研究Ⅱ（実践授業②）

ア 単元について

単元名 国語科 「こそあど言葉を使い分けよう」「言葉の広場」（全3時間）

本研究の指導計画（表4）を次のように設定した。

表4 指導計画

時数	指導目標
1 / 3	○ 指示語の働きに関心を持ち、「こそあど言葉」を集める。
2 / 3	○ 指示語の種類や働きを理解し、それが指し示す内容をつかむ。
3 / 3	○ 文脈の中での指示語の働きを理解する。 ○ 語彙の補充をする。

イ 対象児童への主な手立て、様子、考察

対象児童への主な手立てと、その手立てに対する様子、考察を次頁表5に示す。

表5 国語科「こそあど言葉を使い分けよう」「言葉の広場」における主な手立て、様子、考察

手立て	工夫	手立ての内容	児童の様子	考察
指示を理解し、学習の進め方が分かるようにするための手立て	課題提示の工夫	<p>視覚的な情報がある方が理解しやすいことを生かし、ワークシートに、あらかじめ吹き出しをかきこんでおく(図2)。また、漢字を含む場合は、ふりがなを付けておく。</p>	<p>あらかじめ吹き出しがかかれたワークシートを使用することで、スムーズに取り掛かり、会話文を作ることができた。自分で作ることができたときには、作った会話文を友達と見比べる様子が見られた。ふりがなを付けたワークシートでは、問題文を声に出して読み、取り掛かっていた。</p>	<p>見るだけでも誰と誰の会話文を作ればいいのか分かるようなワークシートの工夫が、具体的なやり方の理解につながった。また、漢字にふりがなを付けることで、児童が自ら課題を把握でき、スムーズに取り掛かりにつながったと考える。</p>
		<p>具体的にやり方を示しながら説明すると理解しやすいこと、パソコンなど視覚的なものに興味をもつことを生かし、最初の問題のやり方をプロジェクトを使って例示する。(写真3)</p> <p>視覚的なものに興味が向きやすいことを生かし、プロジェクトを用いて提示(写真3)する。どの部分を見ればいいのか、分かりにくくならないように、一つずつ提示する。</p>	<p>提示された画面を見ている間は、注視していた。そして、どのようにこそあど言葉を使って会話文を作るのかの例示により、自分で取り掛かることができた。「(例示したのと)同じでもいいよ。」と声を掛けられたことで、すぐに写していた。</p> <p>プロジェクトで一つずつ提示される画面を注視しながら、教師の説明を聞き、次の活動にスムーズに取り掛かることができた。</p>	<p>プロジェクトによる提示は、興味を引き付けるのに効果があった。また、やり方を例示することで、学習の進め方を理解させやすくなったと考える。</p> <p>その場面に必要な情報だけを整理して提示することで、多くの視覚情報の中から、どの場面の説明なのかを理解させやすくなり、スムーズな取り掛かりにつながったと考える。</p>
学習課題に集中できるようにするための手立て	興味をもたせるための工夫	<p>周囲の様子に興味が向き、すぐに反応することができることを生かし、道具を用いて児童たちに演じてもらうなど、動作化を取り入れる。</p> <p>学習への意欲を高め、スムーズに学習に取り掛かることができるように、授業の導入で、楽しく簡単に答えることができる活動を用意する。</p>	<p>動作化では、友達の演技に注目することができた。</p> <p>漢字カードを、友達と声をそろえながら次々に読んでいた。その後の学習へもスムーズに取り掛かることができた。</p>	<p>動作化は、興味を引き付けるのに効果があった。また、児童が動作化を見ることで、集中できるようになり、こそあど言葉を使う場面を理解できるようにすることにもつながったと考える。</p> <p>漢字カードにヒントとなる絵が付いていたこと、テンポよく繰り返したことで、興味を引き付けることができたと考える。</p>
	学習環境の整理	<p>机上での活動がしやすいように、使わないものは出させず、必要に応じて筆箱や教科書などを出すよう声掛けをする。</p>	<p>必要な学習用具をその都度出すことで、話を聞く場面では、道具をさわったり、音を立てたりすることがなくなった。</p>	<p>児童が、話を聞くことに集中したり、机上での活動をしやすいしたりすることができ、児童にとって集中しやすい状態を作ることにつながったと考える。</p>



図2 吹き出しをかきこんだワークシート



写真3 プロジェクタによる例示

ウ 事後アンケート

授業後、児童へのアンケートを実施した。

手立てのうち、プロジェクトによる画面提示、絵の使用、動作化、ワークシートについてアンケートをした。どの手立てについても、対象児童は、「とても役に立った」、「まあまあ役に立った」と回答している。また、「今日の学習はよく分かりましたか。」の質問に対し、いずれも「だいたい分かった」と回答している。このことから、対象児童にとって、これらの手立てが役に立つものであったと考える。

対象児童の特性を考慮して講じた手立てについて、対象児童以外の児童はどう回答したのか見てみた(図3)。どの手立てについても90%以上の児童が「とても役に立った」「まあまあ役に立った」と回答している。また、「今日の学習はよく分かりましたか。」の質問に対し、91%の児童が「とてもよく分かった」、9%の児童が「だいたい分かった」と回答している(図4)。このことから、対象児童以外の多くの児童にとっても、これらの手立てが、役に立つものであったと考える。

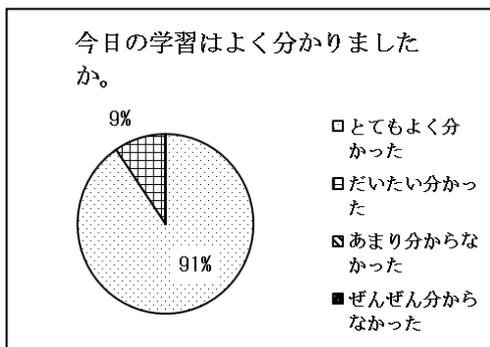


図4 理解についてのアンケート結果

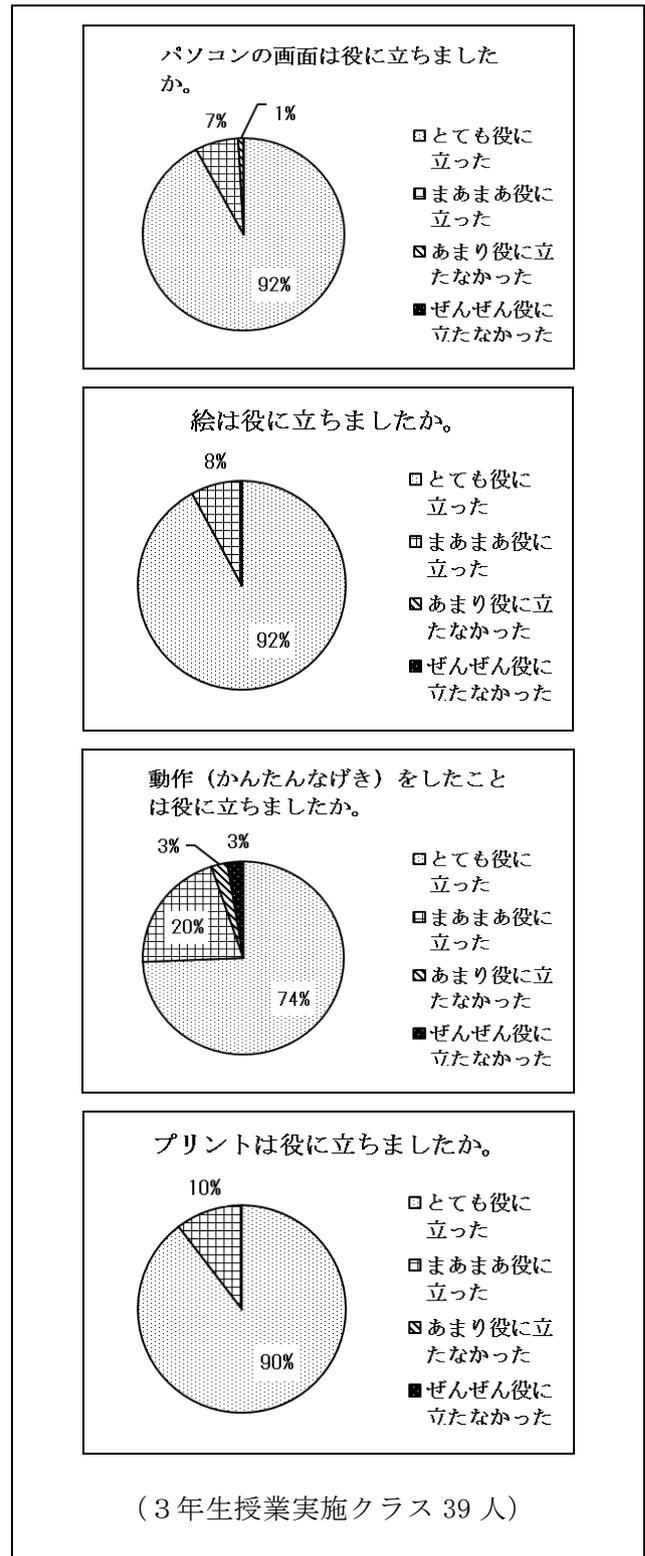


図3 手立てについてのアンケート結果

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

実践授業①, ②を通して, 5回の事後アンケートを実施した。

対象児童は, 楽しく学習できたかどうかについて, 2回が「とても楽しく学習できた」, 3回が

「まあまあ楽しく学習できた」と回答している。また、よく分かったかどうかについては、実践授業②の事後アンケートの部分でも述べたように、いずれも「だいたい分かった」と回答している。このことから、対象児童にとって比較的満足できる授業であったのではないかと考える。そして、このような授業を積み重ねていくことで、対象児童にとって分かる喜びや学ぶ意義を感じることができるものになっていくと考えている。

事例研究を通して、通常学級における特別な支援を要する児童の特性を考慮した授業展開を考えてきた。実態把握を基に、特別支援教育の視点を取り入れた授業展開を工夫することで、対象児童にとって、より楽しく分かりやすい授業を展開するための方策を探ることができた。

(2) 今後の課題

学習に集中できたかどうかの質問に対し、対象児童は、5回の事後アンケートすべてにおいて、「あまり集中できなかった」と回答している。手立てを再度見直し、検証していく必要があると考える。

また、対象児童の特性を考慮して講じた手立てが、それ以外の多くの児童にとっても役に立ったと考えたことを、実践授業②の事後アンケートの部分で述べた。しかし、「あまり役に立たなかった」「ぜんぜん役に立たなかった」と回答している児童もいることから、その児童にとっても役に立つ支援を探っていく必要があると考える。

特別支援教育の視点を取り入れ、児童の特性を考慮して授業展開を工夫することは、分かりやすい授業を、より多くの児童に提供できることにつながる。児童一人一人の特性を把握し、それぞれの特性を考慮した支援を考え、検証を積み重ねていくことで、誰もが満足できる授業が展開できるようになっていくと考える。

《引用文献》

- 1)2) 品川 裕香 『気になる子がわくわく育つ授業』 2009年 小学館 p.19, p.87

《参考文献》

- ・ 文部科学省 『特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編』 平成21年6月
- ・ 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 総則編』 平成20年8月
- ・ 文部科学省 『今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）のポイント』
2003年3月

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/030301a.htm

(2010年3月)

- ・ 佐賀県教育委員会 『平成21年度佐賀県教育委員会の基本戦略』 2009年4月
<http://www.pref.saga.lg.jp/web/21kyouiku-senryaku.html> (2010年3月)

《参考URL》

- ・ 佐賀県教育センター 『LD児等のスクリーニングのためのチェックリスト』
<http://www.saga-ed.jp/shidou/tokubetusien/index.htm> (2010年3月)